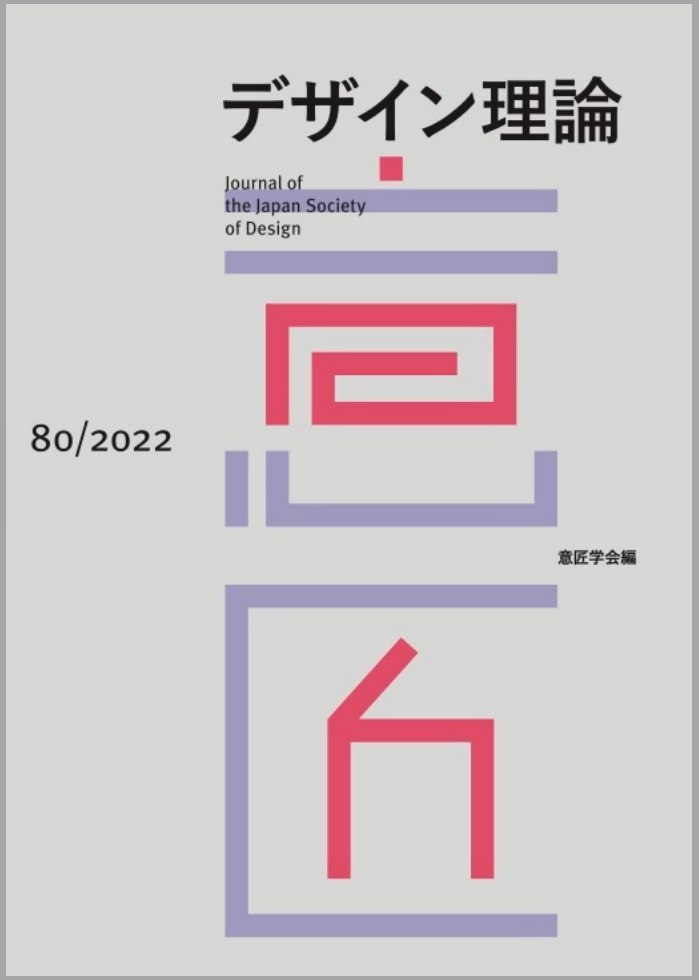
意匠学会

デザイン理論

投稿ガイド

学術雑誌への論文の掲載の可能性を高めるために

デザイン理論
Journal of
the Japan Society
of Design
79/2021
意匠学会編


デザイン理論
Journal of
the Japan Society
of Design
80/2022
意匠学会編

学問の発展

↑

学会（学術組織）

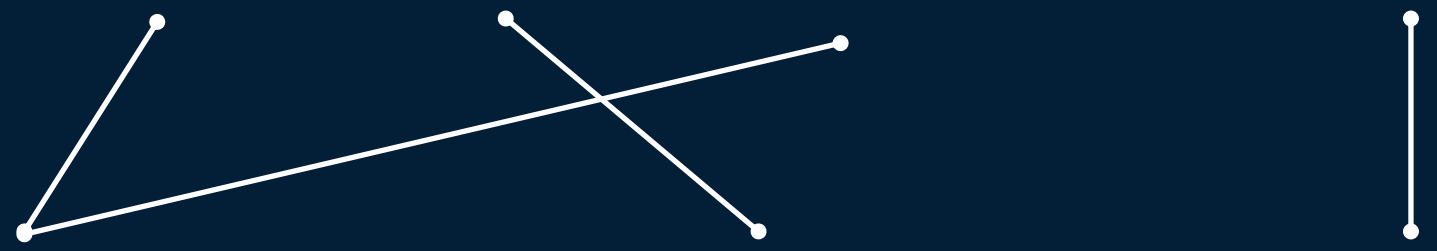
研究集会の開催

学術雑誌の発行

学術論文	査読によって掲載の可否を決定
研究報告	国際会議に出席しての報告 展覧会の報告 学術的価値の高い資料（アーカイブ）の紹介 （デザイン研究に資する情報） 学術論文の前段階にあるような論考 学術論文として真価が問われるべき論考は 原則として研究報告に含まない
書評	紹介すべき本があれば編集委員にお知らせください
学会報告	学会報告　部会報告
発表要旨	発表後に作成して編集担当までお送りいただきます

論文とは何か？

信頼のおける知識をあらわす信頼のおける文章の形式



根拠づけられている
理由の言明
典拠の明示

考察されている
緊密な構成
意味の導出

形式に従っている
序論と結論
注のスタイル

評価の観点

学術論文の3段構成

序論 ← これも大事！

本文

結論 ← これも大事！

注 ← これも大事！

論文はコミュニケーション（知識の伝達）

読み手がいることを想定する

読み手は誰か？
詳しく知らない人
丁寧に説明して！

査読者は誰か？
いそがしい人
要点を知りたい！

一番大事なこと
序論において大事なことを簡潔にまとめる

学問的なコミュ力をつけるには
他の人の発表だけでなく質疑に耳を傾ける

読み手を無視した論文
評価が低くなりがちです

論文の掲載の可能性を高めるために

1　序論をととのえる
2　注をととのえる
3　誰かに見てもらう
4　枚数を確認する
5　体裁をととのえる
6　最終確認

論文の掲載の可能性を高めるために

1　序論をととのえる
2　注をととのえる
3　誰かに見てもらう
4　枚数を確認する
5　体裁をととのえる
6　最終確認

序論（はじめに）

- 何について論じるか
- 対象に注目する理由
- 論文の目的　論文の意義
- 先行研究
- 論文の独自性の主張
- 本文の前提について説明
- 本文の流れ

序論を丁寧に書くことで論文としての条件が整っているか自分で確認できる

何について論じるか明確か
先行研究をふまえているか
意義のある論文であるか
オリジナルな論文であるか

序論によって読み手とのコミュニケーションを円滑にする

読み手の興味を引く

論み手の理解を促す

読み手の信頼を得る

序論（はじめに）で触れるべきこと

この通りでなくても、ここに含まれるポイントが最初に分かりやすく触れられているのが望ましいです。

■　論文の紹介

論じる対象について一言で紹介　「本論は　…について論じる」
論じる対象について一言で説明　「…は　…の時代において　…であった」
明らかになる結論を一言で予告　「本論では　…が　…であることを明らかにしたい」

■ 対象に注目する理由

当の対象について論じる理由１「…　に注目する一つ目の理由は…」
当の対象について論じる理由２「…　に注目する二つ目の理由は…」
当の対象について論じる理由３「…　に注目する三つ目の理由は…」

■ 論文の目的および意義

目的を述べる　「本論のねらいは　…である」
意義を述べる　「一連の考察をとおして　…が期待される」
展開の可能性　「一連の考察は…について考えるうえで重要な手がかりとなる」

■ 先行研究 → 論文の独自性の主張

先行研究への言及　「Ａ氏の研究は…を明らかにしている」
独自の内容を主張　「しかし…はあまり顧みられていない。そこでこの論文では…」
独自の方法を主張　「そして…について論じるにあたり…の視点から考察をすすめたい」

■ 本文の前提について説明

概念の意味を定める　「…の語は…として理解されるときもあるが　…の意味でもちいたい」
経緯について述べる　「たしかに　…世紀にも　…はすでにみられた　…世紀になると…　」
背景について述べる　「この時代は　…であり　…がしばしば問題となっていた」

■ 本文の流れ

全体として何が重要か　「以下では　…に重きをおいて議論を進めていく」
論文の流れを紹介する　「第１章では…　第２章では…　第３章では…」
結論をもう一度述べる　「最後に　…が　…であることを明らかにしたい」

>>>

論文の掲載の可能性を高めるために

1　序論をととのえる
2　注をととのえる
3　誰かに見てもらう
4　枚数を確認する
5　体裁をととのえる
6　最終確認

注

ひながた

に問いかけてくるので，美的価値ないしは表現価値において際立っており，一種のアートとみなされて美術館で紹介されてきた。

一般に，デザインに期待されるのは，役立つものの考案であり，切実な問題の解決だが，目先の必要に気を取られすぎると，既存の大きなシステムに巻き込まれ，世間の考えにしばられ，本当に役立つものが何なのか分からなくなり，根本から問題をとらえられなくなる危険がある。デザインの研究も，デザインの実践も，必然性の連関から一歩でも抜け出して，良いデザインと評価のありかたを反省してみてはどうだろう。

45 (43)

註

1 ナターシャ・ジェン Natasha Jen の 2017 年の講演「デザイン思考なんて糞食らえ」は話題となった。台湾出身のジェンはアメリカで教鞭をとるグラフィックデザイナーである。動画の 3 分 20 秒あたりで，デザイン思考をめぐる議論において良し悪しを評価するクリティカルな段階が欠けていると指摘する。https://99u.adobe.com/videos/55967/natasha-jen-design-thinking-is-bullshit.

2 Klaus Klemp, "Diter Ramns, Braun, Vitsœ and the Shrinking World," in *Less and More: The Design Ethos of Dieter Rams*, edited by Keiko Ueki-Polet and Klaus Klemp (Gestalten, 2009), 433–496.

3 ラムス自身の説明。Dieter Rams, "Technologie Design," *Design Report*, no.12 (October 1989): 36–41.

4 Margolin et.al., *Design for the Good Society*, edited by Max Brunisma, Max and Ida van Zijl (nai010 Publishers, 2015).

5 Max Bruinsma, "Introduction of The Utrecht Manifesto," *Design Issues* 32, no.2 (Spring 2016): 37–42.

6 Emma Felton, Oksana Zelenko, and Suzi Vaughan, eds., *Design and Ethics: Reflections on Practice* (Routledge, 2012).

7 Jane Forsey, *The Aesthetics of Design* (Oxford University Press, 2013).

8 Yuriko Saito, *Aesthetics of the Familiar: Everyday Life and World-Making* (Oxford University Press, 2017).

9 4 つの区別は，歴史研究においても有効である。1907 年にドイツ工作連盟が設立された当初，ムテジウスは，目的・材料・技術に適合した形態をもとめたが，1911 年にその考えは浸透したとみて，形態自体の完成をもとめた。ムテジウスは，機能主義者ではないし，形式主義者でもない。ドイツ工作連盟はその後，近代デザインを押し進める啓蒙活動をおこなうなかで機能主義の立場を強めていく。ミース・ファン・デル・ローエは，形態はあくまで機能の結果にすぎないと考えていた。高安啓介『近代デザインの美学』（みすず書房，2015）97–108.

10 Lorraine Besser-Jones and Michael Slote, eds., *The Routledge Companion to Virtue Ethics* (Routledge, 2015).

11 柳宗悦の言説は，民藝の品々のうちに「無心」「素朴」「無欲」「忍耐」「素直」「謙虚」「誠実」「奉仕」「敬虔」「健全」「健康」など徳の美をみており，擬人化の典型である。柳宗悦は，機械生

注の文字数にご注意ください

45 (43)

41

産をよく思わなかったが，民藝の思想にみられる徳の美学は，製品デザインの言説にも通じている。柳宗悦「雑器の美」（1926）「工藝の美」（1927）『民藝四十年』（岩波文庫，1984）80–125.

12 Naoto Fukasawa & Jasper Morrison, *Super Normal: Sensations of the Ordinary* (Lars Müller, 2007).

13 Jonathan M. Woodham, "Good Design," *A Dictionary of Modern Design*, edited by J. M. Woodham (Oxford University Press, 2004), 177–8.

14 Lars Müller and the Museum für Gestaltung Zürich, eds., *Max Bills View of Things: Die gute Form: An Exhibition 1949* (Lars Müller, 2015).

15 Antonio Hernandez, "Die Gute Form am Ende ihrer Möglichkeiten," in *Werk*, Nr.6 (Juni 1968): 403–406.

16 高安啓介『近代デザインの美学』108–111.

17 勝見勝編『グッド・デザイン』（新潮社，1958）.

18 日本産業デザイン振興会編『G マーク大全 ── グッドデザイン賞の 60 年』森山明子監修（日本デザイン振興会，2017）.

19 当時の意匠課長は，選定基準について次のように述べた。「使うための機能から滲み出た形態であることが，グッド・デザインの第一要件となるのであり，これはまた同時に，機能からは必要でない装飾はできるだけ取り去るべきであるということにもなる」。高田忠「グッド・デザイン選定の目的とその手続」『グッド・デザイン ── その制度と実例』（中小企業出版局，1958）前掲書 227.

20 栄久庵憲司の証言，前掲書 144–5.

21 G マーク制度における評価基準をめぐっては次を参照。森山明子「G マークは〈共有と協働〉の時代へ」『a+a 美学研究』13 号（大阪大学美学研究室，2018 年）154–159.

22 関係のデザインについては次を参照。高安啓介「人間の脳・機械の脳・環境の脳」『a+a 美学研究』13 号，106–119.

23 神田誠司『神山進化論 ── 人口減少を可能性に変えるまちづくり』（学芸出版社，2018 年）.

24 高安啓介「社会デザイン」『a+a 美学研究』13 号，134–135.

25 ヴィクトール・パパネク『生きのびるためのデザイン』（晶文社，1974）.

26 山崎亮『コミュニティデザインの時代 ── 自分たちで「まち」をつくる』（中公新書，2012）.

27 加藤尚武編『環境と倫理 ── 自然と人間の共生を求めて（新版）』（有斐閣，2005）. Stephen M. Gardiner and Allen Thompson, eds., *The Oxford Handbook of Environmental Ethics* (Oxford University Press, 2017).

28 ジョン・ロールズ『正義論（改訂版）』川本・福間・神島訳（紀伊國屋書店，2010）.

29 センは，正義の問題において能力 capability を重視する立場をとる。ただし能力の平等がかならずしも最優先されるわけではない。アマルティア・セン『正義のアイデア』池本幸生訳（明石書店，2011）423 以下.

30 五十嵐太郎，山崎亮編『3.11 以後の建築 ── 社会と建築家の新しい関係』（学芸出版社，2014）. Museum für Gestaltung Zürich, Angeli Sachs, eds., *Social Design: Participation and Empowerment* (Lars Müller, 2018). Cynthia E. Smith et al., *Design with the Other 90%: Cities* (Cooper-Hewitt, 2011). Ellen Lupton et al., *Why design now? National Design Triennial* (Cooper-Hewitt, 2010). Andres Lepik, *Small Scale, Big Change: New Architectures of Social Engagement* (Museum of Modern Art, 2010). Cynthia E. Smith et al., *Design for the Other 90%*

論文とは信頼のおける知識を伝えるための信頼のおける文章の形式

注を多くつけようとすることで自分の論が根拠づけられているか確認

(1)
(2)
(3)
(4)
(5)
.
.
.
.

注の表記を確認

欧文はメジャーな表記スタイルに合わせる
APA / MLA / CHICAGO
迷ったら CHICAGO MANUAL に準拠

× 『The Aesthetics of Design』

× 「Aesthetic Concepts」

和文のカッコを使ってはいけない

あくまで例です。かならず注のスタイルを統一してください！

[07] Yuriko Saito, *Everyday Aesthetics* (Oxford University Press, 2010), 205.

[30] Klaus Klemp, “Dieter Rams, Braun, Vitsœ and the Shrinking World,” in *Less and More: The Design Ethos of Dieter Rams*, ed. Keiko Ueki-Polet and Klaus Klemp (Gestalten, 2009), 433-496.

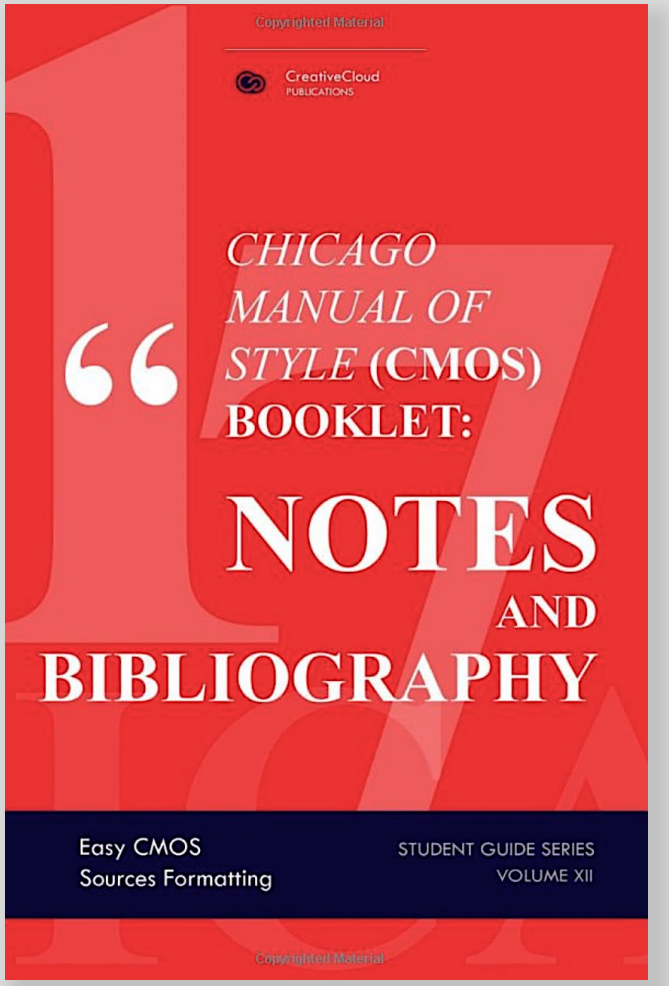
[31] Dieter Rams, “Technologie Design,” *Design Report* 12 (1989): 36-41.

[34] 出川直樹『民芸―理論の崩壊と様式の誕生』 (新潮社, 1988), 48.

[35] 柳宗悦「雑器の美」(1926)『民藝四十年』(岩波文庫, 1984), 80-99.

欧文文献の表記はルールに従う

シカゴスタイルはこちら



>>>

論文の掲載の可能性を高めるために

1　序論をととのえる
2　注をととのえる
3　誰かに見てもらう
4　枚数を確認する
5　体裁をととのえる
6　最終確認

学生の場合はかならず指導教員のチェックを受けたうえでご投稿ください

論文の掲載の可能性を高めるために

1　序論をととのえる
2　注をととのえる
3　誰かに見てもらう
4　枚数を確認する
5　体裁をととのえる
6　最終確認

１４枚以内厳守

レイアウトに従わずにページ数の確認をみずから
積極的に行わなかったうえページ数のカウントを
困難にしている場合、レイアウトに従っているが
ページ超過を知りながら提出を行なった場合、１
ページを超える超過であることが予想される場合。
これらに該当する場合、不受理となることがある。

本文

ひながた

良いデザインと評価の問題

高　安　啓　介

キーワード
グッドデザイン，製品デザイン，倫理，美学，批評
Good Design, Product Design, Ethics, Aesthetics, Criticism

はじめに
1. 評価の基準
2. 評価の歴史
3. 評価の対象
4. 評価の関心
む

41

16

はじめに

デザインの創造をめぐる考察はこれまで活況を呈してきた。イノベーションの掛け声のもとでデザイン思考がいたるところで唱えられたが，ナターシャ・ジェンはいみじくも，デザイン思考をめぐる議論において，何が本当に良いのかを問うような段階が欠けていると批判した[1]。この背景には，新しいものを生み出すための創造の理論がもてはやされてきたのに比して，デザインの評価の前提となる基礎考察への関心がとぼしかった事情もあるだろう。デザイン哲学のなすべき仕事は，一方において創造の理論であり，他方において評価の理論であり，両者はいわば表裏一体の関係にあるのなら，現段階において後者に光を当てて，考察の不均衡を見直さなければならない。

本論は，良いデザインとは何かを考えるうえで基礎となる価値原理について検討したうえで，今日のデザインの評価における二つの傾向について考える。そのひとつは，人間と人間とであれ，製品と製品とであれ，情報と情報とであれ，関係を生み出す仕事がますます評価されるようになっている傾向であり，もうひとつは，環境問題であれ，社会問題であれ，問題にたいして踏み込んだ倫理がもとめられている傾向である。本論はまた，良いデザインや評価のありかたの問い直しが，学問の仕事であるばかりでなく，デザインの内部でおこなわれうる可能性についても論じる。本論はこうした一連の考察をとおして，微に入りすぎる研究ではとらえられない問題連関をとらえようと努める。

本稿は，第 239 回研究例会（2019 年 11 月 23 日，大阪大学）での発表にもとづく。

41

32

本論はそこで次のような手順をとる。第一に，評価の「基準」について論じる。何かある仕事について良いというのは何らかの価値をもつ状態なので，考察を始めるにあたり，評価の基準となる諸価値について検討しておく。第二に，評価の「歴史」の大きな動向をとらえるため，良いデザインを奨励する制度がどのように起こり，日本のGマーク制度がどのように現在にいたっているかに注目する。第三に，評価の「対象」の変化として，製品のような個体を生み出す仕事だけでなく，仕組みのような関係を生み出す仕事もまた，デザインの仕事として認識されていることに注目する。第四に，評価の「関心」の変化として，社会デザインの考えの浸透ともに，以前にもまして倫理面での配慮がもとめられていることに注目する。最後に，評価の「評価」が必要であると結論づける。変化の大きい時代であればこそ，良いか悪いかを判定するだけでなく，何が本当に良いのかを反省する必要があるからである。評価の前提そのものを疑う姿勢は，学問の仕事というだけでなく，批判デザインにおいて強く意識されていることに注目する。

議論を起こすにあたり，ディーター・ラムスが 1985 年にかかげた良いデザインの 10 原則に注目しよう。ラムスがブラウン社のためにデザインした製品の数々は，近代デザインの洗練の極みと言えるが，1970 年代からラムスは良いデザインとは何かを定式化しようとした記録が残されており，1985 年のワシントンでの講演において，今日知られる，良いデザインの 10 原則にゆきついた[2]。ラムスの原則はいわば盛りを過ぎた近代デザインの弁護であり，ポストモダニズムへの批判である[3]。ただし，第九の項目にみる環境への優しさについては，20 世紀後半の環境問題への意識の高まりを反映しているようにみえる。

ラムスの 10 原則は，次の通りである。第一に，良いデザインは先駆的である。第二に，良いデザインは製品を便利にする。第三に，良いデザインは美しい。第四に，良いデザインは製品を分かりやすくする。第五に，良いデザインは慎み深い。第六に，良いデザインは正直である。第七に，良いデザインは長持ちする。第八に，良いデザインは首尾一貫している。第九に，良いデザインは環境に優しい。第十に，良いデザインは可能なかぎりデザインをしない。

ラムスの 10 原則を相対化するために，別の 10 原則を対置したい。それは，社会デザインの原則をまとめたユトレヒト宣言である。この宣言は，2005 年から 15 年までユトレヒトで開かれた五回の社会デザインのビエンナーレのまとめとして[4]，取り組みの要点を 10 項目にあらわした綱領である[5]。ユトレヒト宣言は，社会デザインの理念であり，良いデザインの指針としても読まれうるもので，二つの傾向をもつ。それは，社会デザインとして当然なのだが，人と人との関係の総体としての社会が強く意識されている点であり，各項目のどれも倫理の要請をはらんでいる点である。

注

ひながた

に問いかけてくるので，美的価値ないしは表現価値において際立っており，一種のアートとみなされて美術館で紹介されてきた。

一般に，デザインに期待されるのは，役立つものの考案であり，切実な問題の解決だが，目先の必要に気を取られすぎると，既存の大きなシステムに巻き込まれ，世間の考えにしばられ，本当に役立つものが何なのか分からなくなり，根本から問題をとらえられなくなる危険がある。デザインの研究も，デザインの実践も，必然性の連関から一歩でも抜け出して，良いデザインと評価のありかたを反省してみてはどうだろう。

45 (43)

註

1 ナターシャ・ジェン Natasha Jen の 2017 年の講演「デザイン思考なんて糞食らえ」は話題となった。台湾出身のジェンはアメリカで教鞭をとるグラフィックデザイナーである。動画の 3 分 20 秒あたりで，デザイン思考をめぐる議論において良し悪しを評価するクリティカルな段階が欠けていると指摘する。https://99u.adobe.com/videos/55967/natasha-jen-design-thinking-is-bullshit.

2 Klaus Klemp, "Diter Ramns, Braun, Vitsœ and the Shrinking World," in *Less and More: The Design Ethos of Dieter Rams*, edited by Keiko Ueki-Polet and Klaus Klemp (Gestalten, 2009), 433–496.

3 ラムス自身の説明。Dieter Rams, "Technologie Design," *Design Report*, no.12 (October 1989): 36–41.

4 Margolin et.al., *Design for the Good Society*, edited by Max Brunisma, Max and Ida van Zijl (nai010 Publishers, 2015).

5 Max Bruinsma, "Introduction of The Utrecht Manifesto," *Design Issues* 32, no.2 (Spring 2016): 37–42.

6 Emma Felton, Oksana Zelenko, and Suzi Vaughan, eds., *Design and Ethics: Reflections on Practice* (Routledge, 2012).

7 Jane Forsey, *The Aesthetics of Design* (Oxford University Press, 2013).

8 Yuriko Saito, *Aesthetics of the Familiar: Everyday Life and World-Making* (Oxford University Press, 2017).

9 4 つの区別は，歴史研究においても有効である。1907 年にドイツ工作連盟が設立された当初，ムテジウスは，目的・材料・技術に適合した形態をもとめたが，1911 年にその考えは浸透したとみて，形態自体の完成をもとめた。ムテジウスは，機能主義者ではないし，形式主義者でもない。ドイツ工作連盟はその後，近代デザインを押し進める啓蒙活動をおこなうなかで機能主義の立場を強めていく。ミース・ファン・デル・ローエは，形態はあくまで機能の結果にすぎないと考えていた。高安啓介『近代デザインの美学』（みすず書房，2015）97–108.

10 Lorraine Besser-Jones and Michael Slote, eds., *The Routledge Companion to Virtue Ethics* (Routledge, 2015).

11 柳宗悦の言説は，民藝の品々のうちに「無心」「素朴」「無欲」「忍耐」「素直」「謙虚」「誠実」「奉仕」「敬虔」「健全」「健康」など徳の美をみており，擬人化の典型である。柳宗悦は，機械生

注の文字数にご注意ください

45 (43)

41

産をよく思わなかったが，民藝の思想にみられる徳の美学は，製品デザインの言説にも通じている。柳宗悦「雑器の美」（1926）「工藝の美」（1927）『民藝四十年』（岩波文庫，1984）80–125.

12 Naoto Fukasawa & Jasper Morrison, *Super Normal: Sensations of the Ordinary* (Lars Müller, 2007).

13 Jonathan M. Woodham, "Good Design," *A Dictionary of Modern Design*, edited by J. M. Woodham (Oxford University Press, 2004), 177–8.

14 Lars Müller and the Museum für Gestaltung Zürich, eds., *Max Bills View of Things: Die gute Form: An Exhibition 1949* (Lars Müller, 2015).

15 Antonio Hernandez, "Die Gute Form am Ende ihrer Möglichkeiten," in *Werk*, Nr.6 (Juni 1968): 403–406.

16 高安啓介『近代デザインの美学』108–111.

17 勝見勝編『グッド・デザイン』（新潮社，1958）.

18 日本産業デザイン振興会編『G マーク大全 ── グッドデザイン賞の 60 年』森山明子監修（日本デザイン振興会，2017）.

19 当時の意匠課長は，選定基準について次のように述べた。「使うための機能から滲み出た形態であることが，グッド・デザインの第一要件となるのであり，これはまた同時に，機能からは必要でない装飾はできるだけ取り去るべきであるということにもなる」。高田忠「グッド・デザイン選定の目的とその手続」『グッド・デザイン ── その制度と実例』（中小企業出版局，1958）前掲書 227.

20 栄久庵憲司の証言，前掲書 144–5.

21 G マーク制度における評価基準をめぐっては次を参照。森山明子「G マークは〈共有と協働〉の時代へ」『a+a 美学研究』13 号（大阪大学美学研究室，2018 年）154–159.

22 関係のデザインについては次を参照。高安啓介「人間の脳・機械の脳・環境の脳」『a+a 美学研究』13 号，106–119.

23 神田誠司『神山進化論 ── 人口減少を可能性に変えるまちづくり』（学芸出版社，2018 年）.

24 高安啓介「社会デザイン」『a+a 美学研究』13 号，134–135.

25 ヴィクトール・パパネク『生きのびるためのデザイン』（晶文社，1974）.

26 山崎亮『コミュニティデザインの時代 ── 自分たちで「まち」をつくる』（中公新書，2012）.

27 加藤尚武編『環境と倫理 ── 自然と人間の共生を求めて（新版）』（有斐閣，2005）. Stephen M. Gardiner and Allen Thompson, eds., *The Oxford Handbook of Environmental Ethics* (Oxford University Press, 2017).

28 ジョン・ロールズ『正義論（改訂版）』川本・福間・神島訳（紀伊國屋書店，2010）.

29 センは，正義の問題において能力 capability を重視する立場をとる。ただし能力の平等がかならずしも最優先されるわけではない。アマルティア・セン『正義のアイデア』池本幸生訳（明石書店，2011）423 以下.

30 五十嵐太郎，山崎亮編『3.11 以後の建築 ── 社会と建築家の新しい関係』（学芸出版社，2014）. Museum für Gestaltung Zürich, Angeli Sachs, eds., *Social Design: Participation and Empowerment* (Lars Müller, 2018). Cynthia E. Smith et al., *Design with the Other 90%: Cities* (Cooper-Hewitt, 2011). Ellen Lupton et al., *Why design now? National Design Triennial* (Cooper-Hewitt, 2010). Andres Lepik, *Small Scale, Big Change: New Architectures of Social Engagement* (Museum of Modern Art, 2010). Cynthia E. Smith et al., *Design for the Other 90%*

図版

A4で組んで B5で仕上がるとき
図が小さくならないことがある
レイアウトは余裕をもってする

A4

B5

ひながた

ワードのひながたをご利用ください

自信の無い場合には早めに編集事務局に問い合わせてください

論文の掲載の可能性を高めるために

1　序論をととのえる
2　注をととのえる
3　誰かに見てもらう
4　枚数を確認する
5　体裁をととのえる
6　最終確認

目次

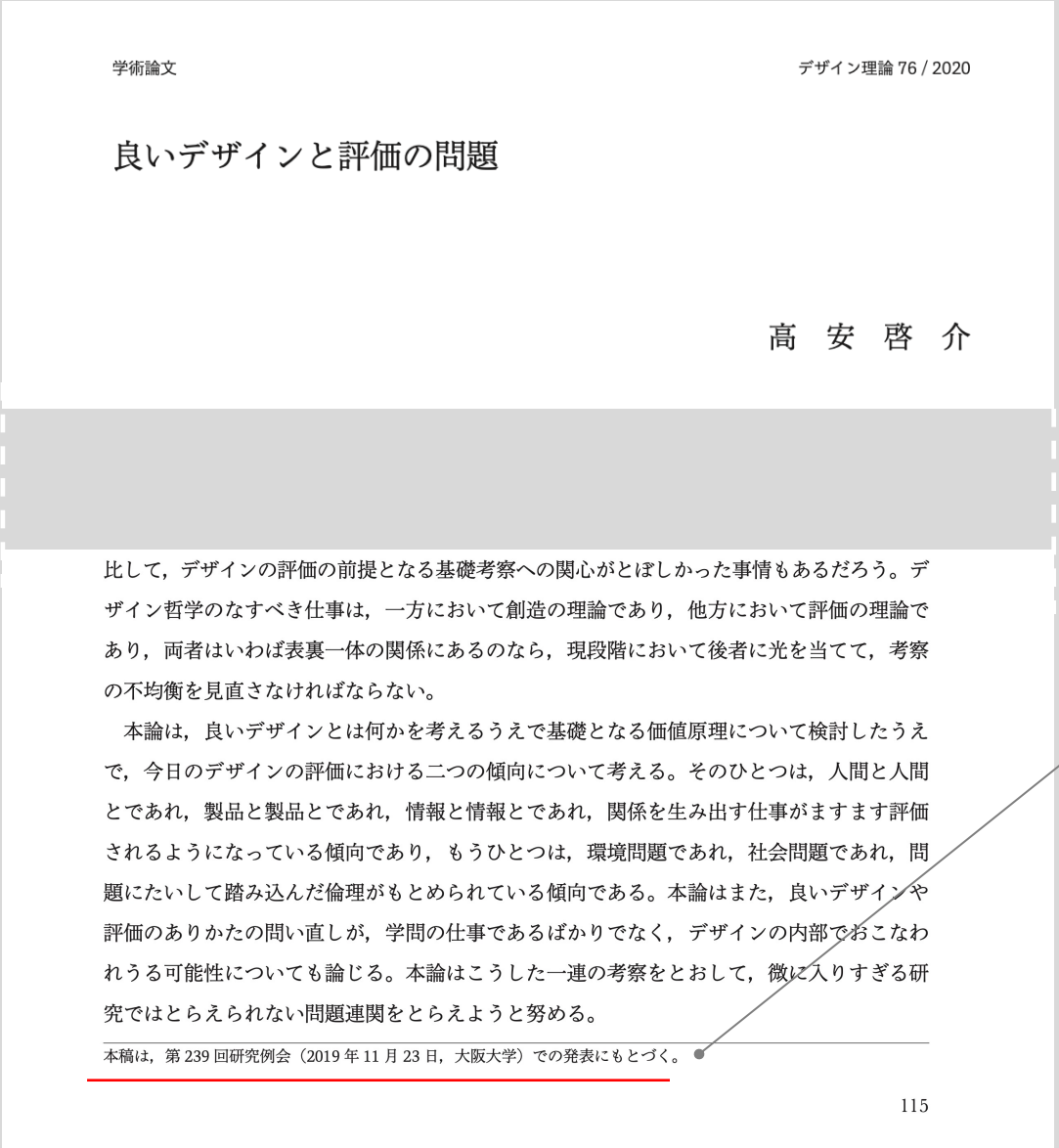
はじめに、むすびに、数字なし
小見出しに数字をふる

良いデザインと評価の問題

高　安　啓　介

キーワード
グッドデザイン，製品デザイン，倫理，美学，批評
Good Design, Product Design, Ethics, Aesthetics, Criticism

はじめに
1. 評価の基準
2. 評価の歴史
3. 評価の対象
4. 評価の関心
むすびに



良いデザインと評価の問題

高　安　啓　介

比して，デザインの評価の前提となる基礎考察への関心がとぼしかった事情もあるだろう。デザイン哲学のなすべき仕事は，一方において創造の理論であり，他方において評価の理論であり，両者はいわば表裏一体の関係にあるのなら，現段階において後者に光を当てて，考察の不均衡を見直さなければならない。

本論は，良いデザインとは何かを考えるうえで基礎となる価値原理について検討したうえで，今日のデザインの評価における二つの傾向について考える。そのひとつは，人間と人間とであれ，製品と製品とであれ，情報と情報とであれ，関係を生み出す仕事がますます評価されるようになっている傾向であり，もうひとつは，環境問題であれ，社会問題であれ，問題にたいして踏み込んだ倫理がもとめられている傾向である。本論はまた，良いデザインや評価のありかたの問い直しが，学問の仕事であるばかりでなく，デザインの内部でおこなわれうる可能性についても論じる。本論はこうした一連の考察をとおして，微に入りすぎる研究ではとらえられない問題連関をとらえようと努める。

本稿は，第 239 回研究例会（2019 年 11 月 23 日，大阪大学）での発表にもとづく。

本稿は，第 XXX 回研究例会(20XX 年 XX 月 XX 日，XX大学)での発表にもとづく。

1頁目

英文要旨

Good Design and the Problems of Evaluation

TAKAYASU, Keisuke

接続詞、冠詞、前置詞、以外は大文字で始める

ネイティヴチェックをかならず受けてください

Questions about good design are inherent in the history of human creation simply because humans want the best. However, after the end of the World War II, and particularly during the 1950s, the very notion of good design was promoted, and many countries saw the establishment of institutions aiming to become involved in it. Most campaigns recommended early on that industrial products meet modern design ideals, and Dieter Rams's functionalist criteria have been maintained to a degree in many award schemes for good design in an increasing number of countries. Today, however, we must reconsider the process of evaluating good design to keep up with varying design practice issues.

This paper discusses the following points: (1) the criteria that effectively explain the concept of good design, namely, practical value, ethical value, and aesthetic value; (2) the institutions that promote social awareness of good design by presenting design awards and others; (3) the objects (not limited to industrial products) to be evaluated whilst embracing ideas such as intangible projects to rebuild social community; (4) issues outside the scope of commercial interest that aim to solve social problems or explore unknown possibilities in human creation.

論文の掲載の可能性を高めるために

1　序論をととのえる
2　注をととのえる
3　誰かに見てもらう
4　枚数を確認する
5　体裁をととのえる
6　最終確認

いまいちど確認

投稿既定

執筆要項

デザイン理論　投稿規程

昭和37年11月11日改正，昭和60年11月８日改正，
平成２年11月10日改正，平成６年７月９日改正，
平成14年11月９日改正，平成18年11月18日改正，
平成24年11月24日改正，平成27年７月25日改正
令和２年10月１日改正

1．内　　容：　デザインに関する未発表の論文，研究報告等。

2．投稿資格：　本会会員

3．採　　択：　採否及び掲載号については編集委員会が決定する。ただし，原則として同一会員の論文を１年以内に二度掲載することはしない。

4．査　　読：　学術論文については，編集委員会が査読者２名に依頼する。査読結果は編集委員会が本人に通知する。結果は，（A）無条件採用，（B）条件付採用，（C）不採用，とする。学術論文以外については，編集委員会において掲載の可否を判断し，掲載の場合でも必要に応じて修正等を依頼することがある。

5．執筆要領：　別に定める。

6．提出期限：　基本的には随時。ただし学術論文は，査読のため，８月夏号掲載希望は，１月15日，２月冬号掲載希望は，６月30日を締め切りとする。学術論文以外は，これは投稿予告の期限で，実際の投稿期限は，それぞれ３月31日，８月31日とする。

7．提 出 先：　意匠学会編集委員会

投稿既定

確認しましょう

抜き刷りを：　□申し込む　□申し込まない　部数：　部

発送先住所：　□上記連絡先に同じ　□以下の住所に送る

〒

14頁以内厳守

投稿時セルフチェック

原稿及びレイアウト見本作成

- □ 本文は 10 ポイント相当 1 頁 41 字 × 32 行（1321 文字）になっている。
- □ 注は 9 ポイント相当 1 頁 45 字 ×41 行になっている。
- □ 図版や表は、適切にトリミングしサイズを調整したうえでレイアウトされ、キャプションが付されている。
- □ 学術論文は、本文・図版・注をすべて含んで仕上がりが規定ページ数以内におさまっている。
- □ 学術論文は14頁以内，研究報告等は 8 頁以内。頁数超過原稿は受け付けない。
- □ 図版等の著作権については著者自身が事前に許可を得ている。当学会は著作権に関する責任を負いません。
- □ 本文第一頁に、表題・著者名・キーワード（和欧併記で 5 語以内）・目次が適切に記されている。
- □ 欧文要旨（原則英文）は表題・著者名・本文（約 200 語）とし、ネイティヴの校閲を得ている。

投稿時の添付ファイル

- □ ① もれなく記入した投稿票（セルフチェック欄を含む）
- □ ②『デザイン理論』誌面の字詰め・行詰めにあわせ、本文・図版・注をレイアウトしたPDFもしくはWORDファイル
- □ ③ 欧文要旨のPDFもしくはWORDファイル

やむをえず郵送する場合、上記の①～③を印刷したものを下記までお送り下さい。

〒560-8532　大阪府豊中市待兼山町1-5 大阪大学大学院文学研究科 高安啓介

不採用の決定について

厳正な審査の結果、投稿されたご論文が、不採用となることもあります。それはけっしてご研究の価値を否定するものではありません。執筆にあたっての労苦が報われずとても残念なことではありますが、意味深い研究であればこそ、時間をかけて修正をして、良いかたちで再投稿してほしいと願っています。

査読者へのお願い

不採用のときはどうすれば採用される論文に
なるかについて建設的なコメントをください。

学会参加のすすめ

他の人の研究に触れることは自分の研究を相対化するための良い機会です。他の人の発表の質疑の場に居合わせることで、自分の研究にどんな指摘がなされうるか会得できます。

ベテランのかたは研究発表にたいして、それが論文として投稿されることを想定したうえで、何に気をつけて論文に仕上げたらいいか具体的なコメントを下さるようお願いします。

学術論文	査読によって掲載の可否を決定
研究報告	国際会議に出席しての報告 展覧会の報告 学術的価値の高い資料（アーカイブ）の紹介 （デザイン研究に資する情報） 学術論文の前段階にあるような論考 学術論文として真価が問われるべき論考は 原則として研究報告に含まない
書評	紹介すべき本があれば編集委員にお知らせください
学会報告	学会報告　部会報告
発表要旨	発表後に作成して編集担当までお送りいただきます

研究報告

（編集委員会にて掲載の可否を決定）

国際会議に出席しての報告
展覧会の報告
学術的価値の高い資料（アーカイブ）の紹介

デザイン研究に
資する情報

学術論文の前段階にあるような論考
学術論文として真価が問われるべき論考は
原則として研究報告に含まない

8頁以内（1頁41字×32行）

投稿既定

執筆要項

学問の発展

↑

学会（学術組織）

研究集会の開催

学術雑誌の発行

このスライドはこちらからご覧いただけます